

凝結表現におけるステレオタイプⁱ

Stereotypicality in Frozen Expressions

高 田 晴 夫

TAKADA Hareo

Abstract

This paper aims to show, through several examples of frozen expressions, how the notion of stereotypicality has an explicative value for their process of creation from a naming as well as semantic point of view. On the one hand, Méjri (2003) has already exemplified this point through French and Arabic examples, and on the other hand Mosbah (2006) has done the same task, but only through French ones. This paper does not aim to advocate a particular established thesis but only contribute to the providing of some illustrations for a prospective one, by considering Japanese examples of frozen expressions, in order to support such an explicative value of the notion of stereotypicality.

Keywords : 凝結表現、ステレオタイプ、命名、脱ディスクール化、メタ言語的操作、推論的操作

0. はじめに

本稿の目的は、凝結表現に関する先行研究において、ステレオタイプが多様であること、しかし、命名論の視点からみれば、ステレオタイプは、その多様性にも係わらず、凝結表現の創造過程において、統一的な説明的価値を持つことを示す点にある。

1. 研究対象と方法論

本稿で研究対象としてとりあげるステレオタイプは如何なるものを明確にしておこう。S.メジュリ (1997) はステレオタイプについて以下のように分類しており、本稿もこれに従うⁱⁱ。本稿がとりあげるステレオタイプは次ページの図1の網かけのタイプの一番下にあがっているステレオタイプと同じタイプ（動詞句）の凝結表現（以下の(1)）と、この図には明示されていない以下のような命令文の形をした複合語（以下の(2)(3)）だけを

ステレオタイプと呼ぶ。

- (1) avoir quelque chose à cœur (≪あるものに強い関心をもつ≫)
- (2) marie -couche-toi là (≪ 浮気っぽい女 ≫)
- (3) suivez-moi jeune homme (≪ 婦人帽のリボン ≫)

これらの凝結表現は以下に見るように、それぞれ固有のステレオタイプを前提に成立している。

以下では、まずメジュリ（2003）のステレオタイプに関する研究を紹介する。彼は、人間は、普遍的に、身体の部分を感じの源を見る傾向があるとし、ここにステレオタイプが認められるとしている。次に、D.コルバン（1997, 2000）の研究とS.モスバ（2006）の研究を紹介する。前者は、メタ言語操作ⁱⁱⁱとしてのステレオタイプを、後者は推論に基づくステレオタイプをとりあげている。

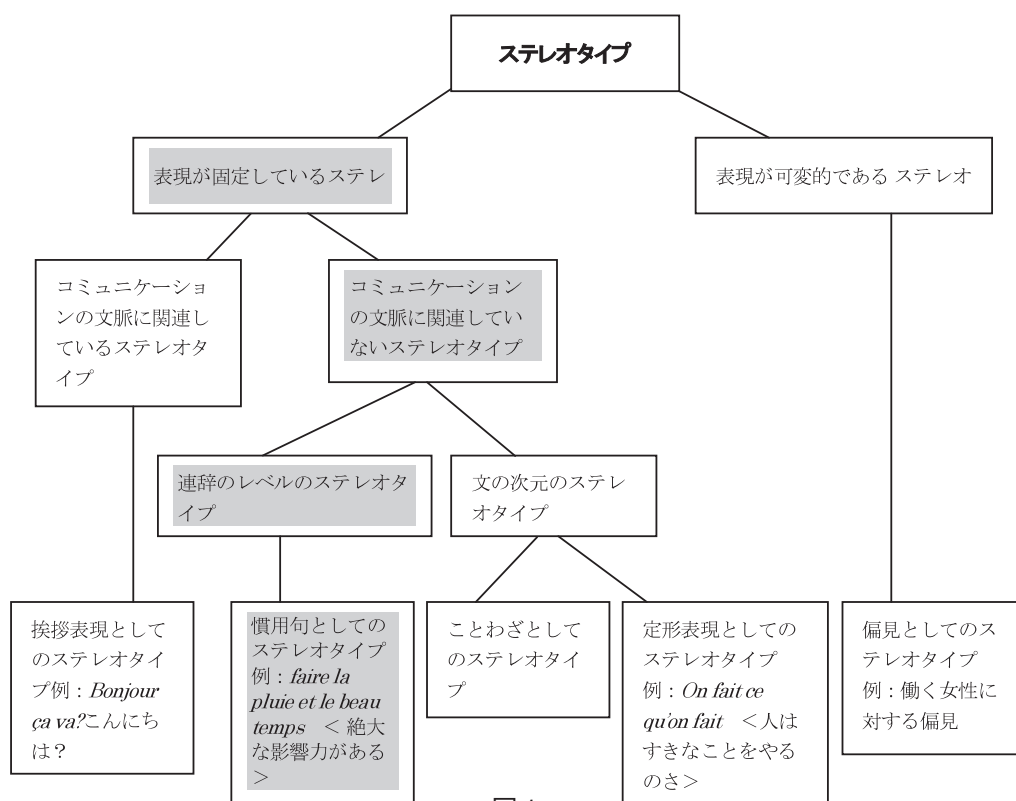


図 1

上にあげた3人の言語学者は、アプローチの仕方においても異なる。メジュリは凝結表現の構造と意味の関係から、コルバンは凝結表現とそれを生み出す生成部門との関係から、モスバは凝結表現の透明性と不透明性の関係から、ステレオタイプにアプローチしている。

しかし、3人に共通しているのは、いずれも、ステレオタイプが凝結表現の創造プロセ

スの説明に重要な役割を果たしているともみなしているということである

さらに、石井和彦（2007）の命名理論モデルを紹介し、これら3人のステレオタイプをこのモデルの中に位置づけることにより、それぞれのステレオタイプが石井のモデルの異なる段階に介入することを示す。

最後に、日本語の凝結表現にみるステレオタイプを紹介する。凝結表現が通言語的に、いかにステレオタイプと深い関係にあるかを理解することを明らかにする。

2. ステレオタイプの定義と作業仮説

ステレオタイプとは一体何なのだろうか？この問いに答えるために、ここで Amossy(2007:93-94)の定義にふれておこう。氏は、プロトタイプと対比させながらステレオタイプを以下のように定義している。

ステレオタイプは社会的諸慣習を記述し、プロトタイプは心理的諸原理を記述する。

この定義はしかしながら、広すぎる。なぜなら、もしこの定義を文字通り受け入れるならば、我々は、言語においては全てが社会的であり慣習的である以上、言語はすべてステレオタイプであると言わなければならないからである。このような不都合を回避するために、本稿では、ステレオタイプをつぎのように定義する。

ステレオタイプは、凝結表現の命名と密接に関連した社会・文化的な知識である。

これは、メジュリ（2003）の次の考え方に依拠する作業仮説である。

複語彙的単位が問題になる時には、我々は、あの命名という、世界を自分の物にする行為が、自分自身や周囲の世界の世界観を暴露してくれることに気がつく。我々が言語的ステレオタイプと呼ぶのは、この世界観の固定化である。

「複語彙的単位」とは凝結表現のことを指している。また、この引用はステレオタイプが命名と密接に結びついていることを示している。次に、メジュリ（2003）のステレオタイプについて見ておこう。

3. メジュリ（2003）のステレオタイプ

メジュリは、古代の人々は身体部分に感情の源を見ろというステレオタイプを持っていたこと、そして、そのことが以下のような凝結した言語表現に固定化していることを指摘している。たとえば、以下の熟語表現において、cœur<心臓>は人間の様々感情、精神作用を表している。

- 1) à contre cœur 「しぶしぶ、不承不承」<envie, désir>
- 2) avoir quelque chose à cœur 「何かに関心を抱く、執着をもつ」<ardeur>
- 3) cœur d'or 「寛大な心の人」<générosité>
- 4) de tout mon cœur 「心から」<sincérité>

5) avoir le cœur gros「気がふさぐ」 <tristesse>

6) porter quelqu'un dans son cœur「誰かに好意を抱く」 <amour>

また、以下の熟語表現においても、foie<肝臓、肝>は人間の様々な感情、精神作用を表している。

7) avoir les foies blancs「おびえる」 <peur>

メジュリは古代人のステレオタイプの信念世界を、信念世界のステレオタイプと呼んでいる。このような古代人のステレオタイプ的世界観は、感情の領域における言語的構造化の契機となっている。体の部分を表す名詞が同時に感情ないしは精神作用を表す例は、どのような言語にも多数見つかる。これは言語に普遍的な現象のようである。たとえば、日本語でも、以下のような凝結表現が存在している。

1) 彼は見かけによらず心臓が強い。

2) 肝をつぶしてしまった。

3) 肝試しをしよう。

4) 肝に銘じておけ。

日本語はフランス語よりも肝臓、肝の方に、より多くの凝結表現を生み出しているようである。このような類型論的違いはあるが、どちらも古代の人々が身体部分に感情の源を見ろというステレオタイプを持っていたこと、そして、そのことが凝結した言語表現を生み出しているという点においては言語の普遍性を認めることができる。

4. 石井（2007）の命名モデル

ステレオタイプを含む凝結表現が、命名論的にどのように、説明されるのかを考察するために、石井（2007）の命名モデルについて紹介しておく。彼は4つの段階と5つの構成要素を区別する。5つの構成要素は以下の通りである。

1) 造語主体をとりまく世界

2) 原概念

3) 命名概念

4) 個人的な複合名詞

5) 社会的な複合名詞

石井は1)から2)を第一段階、2)から3)を第二段階、3)から4)を第三段階4)から5)を第四段階と呼び、自身の命名モデルを「複合名詞形成の第4段階モデル」と名付けている。以下石井の「複合名詞形成の第4段階モデル」を紹介する。

石井によれば、1)の「造語主体をとりまく世界」とは表現の対象となる世界を指す。それは石井が言うように「現実世界の事物・事象から思考内容」(p.159)まで様々なものから構成されているが、造語主体がまだ表現の対象として把握されていない空間である。ま

た、2)の「原概念」とは、造語の意思のもと、連続する世界の一断片を表現の対象として認識したものであるとしている。石井自身は述べていないが、「原概念」とは頭の中にしか存在しない辞書的定義のようなものであると考えられる。従って、「原概念」は言語的な性質を持つ。この段階では、それは耳に聞こえるものでも、目に見えるものでもないものと考えられる。石井は「造語主体をとりまく世界」から「原概念」に至るこの過程を第一段階と呼んでいる。3)の「命名概念」とは、石井によれば、「「原概念」の部分概念であり、より言語に支えられている概念である」(p.162)。「「原概念」の内容は豊かすぎて複合名詞という短い形式によって表すことが出来ない」(p.162)のに対して、「命名概念」は「原概念」の一部に注目して、別の認識としてとりだし、複合名詞をつくるためのものであるという。この「原概念」から「命名概念」までの過程を石井は第二段階と呼んでいる。このプロセスにおいて、造語主体は「原概念」を構成する要素の中から、複合名詞の要素の候補となる要素を選ぶものと思われる。造語主体が選ぶ構成要素の数は、複合名詞を構成する要素の数と同じか、それよりも少し多いかであると思われる。「命名概念」は「原概念」を「最もよく表すものとして、造語主体が注目した側面」(p.163)であり、「別の人により理解され、共感されなければならない」(p.164)。ということは別の人により理解され、共感されなければ、もう一度作り直されなければならないことを意味していると思われる。一般的に命名概念と原概念の間に動機づけが多くあればあるほど、命名概念と原概念の間には前者が後者を代表するという関係にあると考えられる。筆者は、ステレオタイプが介入してくるのはこの段階であると考えている。なぜなら、この第二段階はステレオタイプを言語に固定する言語的操作ないしは要素を多く含んでいると考えられるからである。

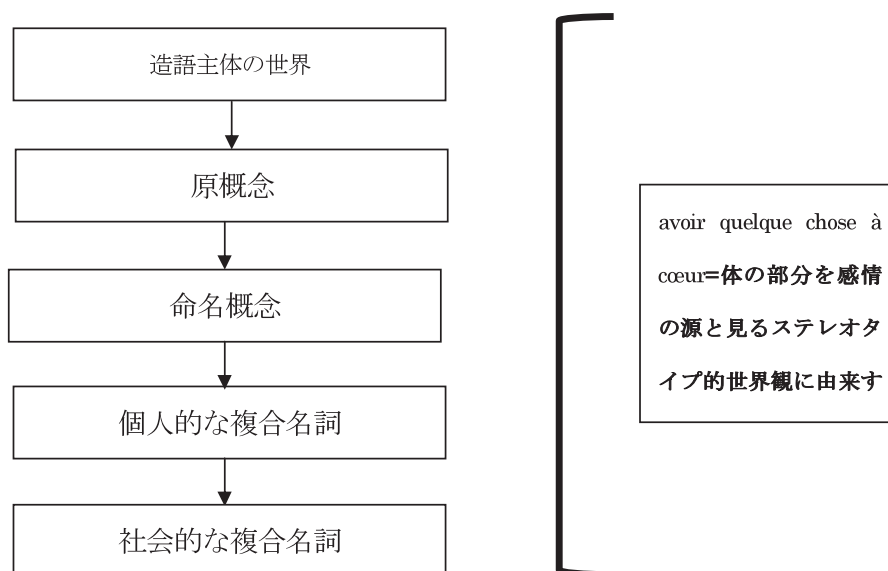
3)から4)の第三段階は命名概念がsignifiantを見いだし、石井が「個人的な複合名詞」と呼ぶ言語記号を形成する空間である。なぜこの言語記号は「個人的」な性質を持つかというと、いまだ言語共同体に受け入れられていないからである。共同体に受け入れられるためには、「個人的な複合名詞」は次に説明する4)から5)の第五段階において、「社会化」というプロセスを経なければならないという。

石井が第四段階と呼ぶ4)から5)の段階は、「社会化」が起こる空間である。石井によれば、「個人的な複合名詞」は意味論的に「くみあわせ的」意味 (p.172) しかをもっておらず、それゆえ「社会化」のプロセスのおかげで、それは「ひとまとまり的」意味 (p.172) を獲得する。このようにして、「個人的な複合名詞」は「社会的な複合名詞」と呼ばれる凝結表現になるのである。

筆者はステレオタイプは「社会化」の中に組み込まれていると考える。なぜなら、ステレオタイプはその意味的凝結の作用をもっており、その作用により「社会化」のプロセスを促進すると考えられるからである。

5. ステレオタイプのモデル外仮説

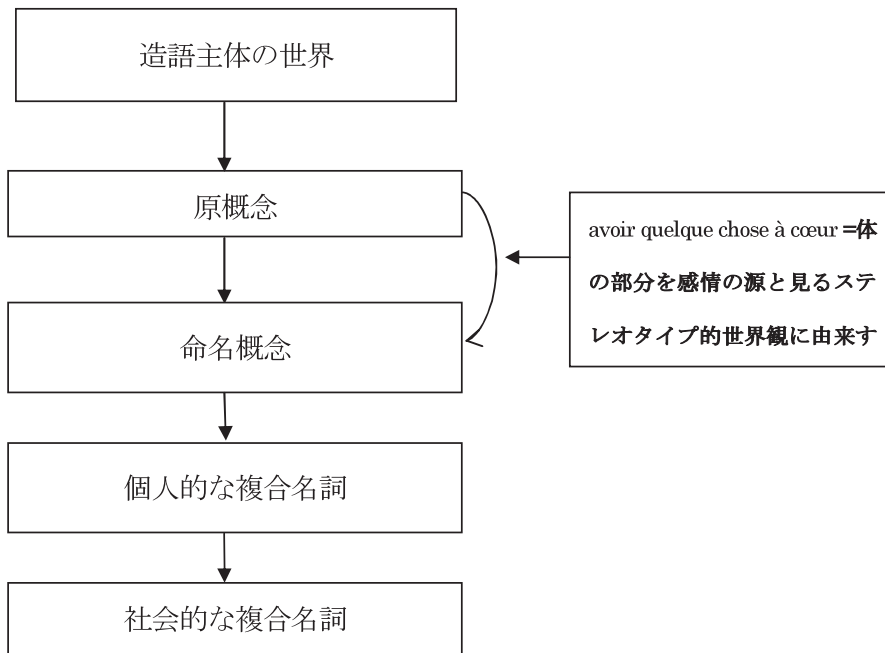
前節において石井（2007）の命名モデルを説明した。本節では、このモデルを用いて、第3節において分析したメジュリの凝結表現のうち 2) のavoir quelque chose à cœur 「何かに関心を抱く、執着をもつ」をとりあげ、これがどのように説明できるかを見ていく。この凝結表現の創造には、二つの仮説が立てられる。まず第一の仮説においては、このメジュリの凝結表現は、もはや歴史的に過去のものになった生産性のないプロセスによりつくり出された痕跡とみなすことができる。造語主体はcœurが表す<熱意>の意味をあらかじめ与えられている意味として受け入れることになるだろう。彼は、この凝結表現の創造の時点で、この<熱意>という感情に関する意味が、ステレオタイプによりcœurに与えられるとは考えないだろう。それ故、造語主体とそう考えたステレオタイプの間に断絶があると考えて、石井のモデルの外側に置かれることになるだろう。これを表示すれば以下ようになる。



6. ステレオタイプのモデル内仮説

第二の仮説では、造語主体はステレオタイプを共時的に生産性のあるプロセスと見る。これにより、感情に関する意味がcœurに与えられる。造語主体は凝結表現の創造時に、それ故この言語的プロセスに訴える。従って、ステレオタイプはモデルの内側に位置づけられる。それ故ステレオタイプはモデルの第二段階に関連づけられる。なぜなら、第二段

階は多くの言語的プロセスが含まれているからである。これを表示すれば以下になる。



7. D.コルバン（1997, 2000）とS.モスバ（2006）のステレオタイプ

本節では、D.コルバン（1997, 2000）のmarie-couche-toi-là <あばずれ女> とS.モスバ（2006）のsuivez-moi jeune homme<（婦人用帽子）の飾りリボン>の例を分析する。

7.1 D.コルバンのmarie-couche-toi-là <あばずれ女>の分析

まず、コルバンの例から見て行く。筆者は、marie-couche-toi-là はメタ言語操作から生ずるステレオタイプであると考え。なぜなら、コルバンによれば、この凝結表現は、起源的に、虚構的に発せられた紋切り型の性質をもつ発話とみなすことができるからである。それでは、なぜこれがメタ言語操作によるものとするのか。それは、コルバン自身が以下のように述べているからである。

La dédiscursivation consiste à construire une unité lexicale à partir d'une séquence formulaire, réaliste ou non.^{iv}

「脱ディスクリプタ化は、それが現実的要素連続であろうと非現実的要素連続であろうと、ある決まり文句的要素連続から語彙的単位を作る」(6.2.2節)

この引用の中の「決まり文句的要素連続」とは、ある指向対象と優先的に結びつく発話の

ことである。このことは次のコルバンの断片的な記述からも明らかである。

. la discursivaion, opération qui construit des unités lexicales en reproduisant la forme d'énoncés réels ou fictifs associés ou associables de façon privilégiée à leurs référents.^v

「指向対象に優先的に結びついているか、あるいは結びつけられうる現実的あるいは仮想的発話形式を再現することにより、語彙的単位を創造する操作としての脱ディススクール化」(6.4節)

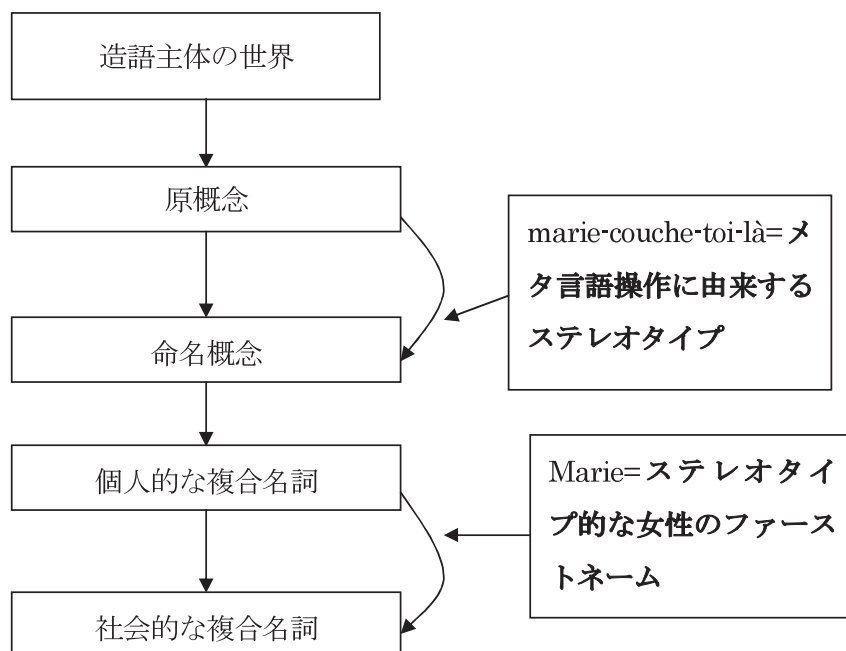
以上のコルバンの二つの引用から、「脱ディススクール化」とはディススクールの中からある発話ないしはその一部を取り出し、それを語彙的単位にする操作であること、そしてこの操作がメタ言語操作であることは明白である。

ここで、特に次の二点を指摘しておきたい。

まず第一点目は、コルバンは、脱ディススクール化により構築しているところのものを「決まり文句的要素連続」(séquence formulaire)と呼んでいること、そして、このような文脈で、氏はséquence formulaireと呼んでいるところのものをステレオタイプの性質をもつ凝結表現と理解しているということである。

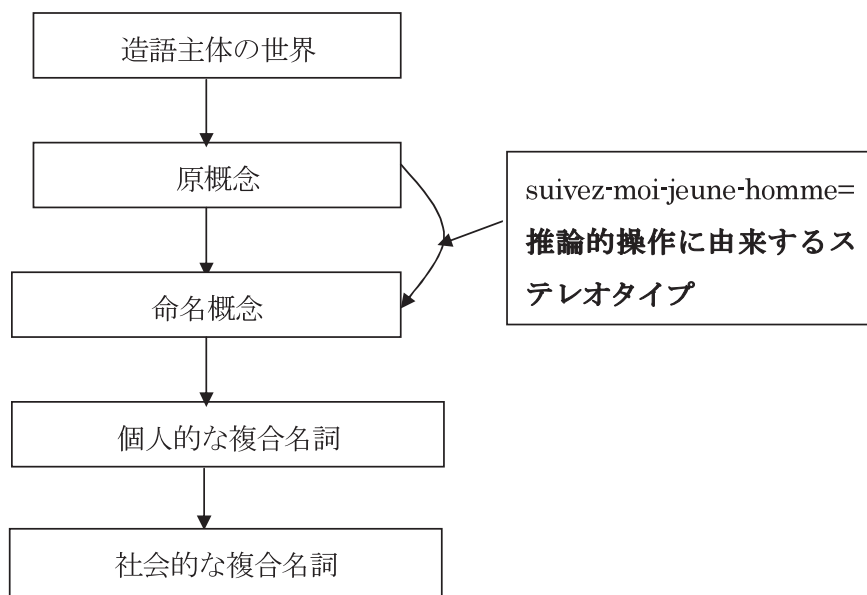
第二点目は、marie-couche-toi-làは、意味的に、この発話が向けられる人を指すということである。この表現の虚構的な性質は、キリスト教社会では女性の典型的なファースト・ネームであるMarieの使用に帰することができる。実際に、Marieを他の多くのファースト・ネームを排除するかたちで選択している点は、ステレオタイプのである。なぜなら、すべての〈あばずれ女〉が、Marieという名前をもっている訳ではないからである。

コルバンのmarie-couche-toi-làのように二つの意味をもつステレオタイプは、石井のモデルではどのように捉えることが出来るであろうか？それは、原概念と命名概念の間の第二段階において介入するものである。なぜなら、メタ言語操作は、凝結表現においてステレオタイプを固定するために必要なプロセスの一つであり、第二段階に係わるものであると考えられるからである。marie-couche-toi-làの中においてMarieという女性のファースト・ネームが他のファースト・ネームを排除して使用されている事実が示すステレオタイプについて言えば、筆者は、それは社会化のプロセスの引き金として機能しているので、第四段階において介入すると考える。それは、個人的な複合名詞から社会的な複合名詞への移行の引き金になっている。その意味的凝結を理由として、社会化の引き金をそこに見ることは容易である。最初に述べたふたつの意味をもつステレオタイプとは、このように考えることができる。



7.2 S.モスバ (2006) の*suivez-moi jeune homme*< (婦人用帽子) の飾りリボン>の分析

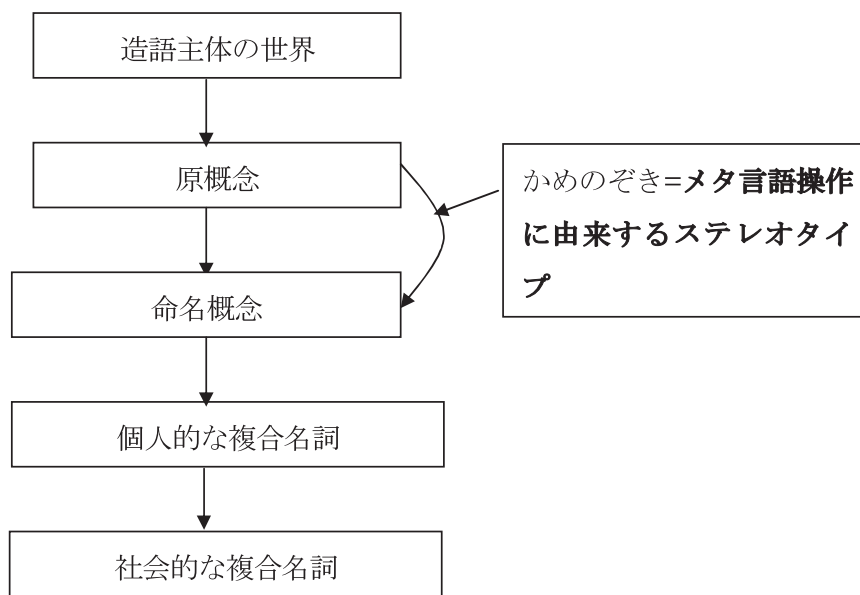
次にS.モスバのステレオタイプについて説明する。彼がとりあげている例は*suivez-moi jeune homme*< (婦人用帽子) の飾りリボン>である。氏のステレオタイプは造語主体の推論の認知能力に由来する。その造語プロセスは以下の通りである。まず、帽子のリボンを命名する主体は、リボンのゆらゆらと揺れる形と若い青年を誘惑する女の手のしぐさの社会的にコード化されたイメージの間に存在する類似性に注目する。次に、命名主体は比喩的類似に基づいて主観的に推論する<青年よ、私についておいで>という発話を含むひとつの言説を心の中に聞く。この言説が、現実のものであろうと虚構のものであろうと構わない。さらに、命名主体は、この言説から上記の発話を取り出し、脱文法化(=dégrammaticaliser^{vi})ないしは脱偶発化(=décontingifier^{vii})し、それを実詞に再範疇化する。従って、推論的ステレオタイプは造語プロセスにおいて重要な役割を果たすと思われる。とくに石井のモデルの第二段階においては、重要な役割を果たしている。なぜなら、推論的操作は、凝結表現においてステレオタイプを固定化するために必要なプロセスの一つであり、この操作は、石井のモデルにおいては、第二段階に深く関与していると考えられるからである。石井のモデルにおける*suivez-moi jeune homme*の創造の推論的操作を図示すると以下のようになる。



上の図において注目すべき点は、suivez-moi jeune hommeの場合、ステレオタイプは第二段階においてしか関与しないのに対して、先の図marie-couche-toi-làの場合は、第二段階と第四段階において関与することである。この違いは、二つの造語が命令文という同一の形を持つにも係わらず、前者がこの発話を述べる人をさすのに対して、後者がこの発話が向けられる人をさすという違いに帰することができるかもしれない。

8. 日本語の例

本稿を終える前に、ステレオタイプによる日本語の造語の例をひとつ紹介する。「かめのぞき」（甕覗）という名前の酒が新潟にある。「かめのぞき」は、「かめ」が酒壺を表し、「のぞき」は身を屈める行為を表している動詞的述語である。この命名は、「甕（かめ）」の蓋をあけて、身をかがめながら酒がまだどの位残っているか中を覗（のぞ）き込んでいる酒飲みのイメージを喚起させてくれる。すべての酒飲みが、そうするわけではないからである、このイメージはステレオタイプである。この表現は、そのようなステレオタイプの行為が差し向けられる先にある対象を指している。その創造はmarie-couche-toi-làやsuivez-moi-jeune-hommeと同様に、石井のモデルの第二段階に属する操作の一つに帰することができる。それはステレオタイプを複合名詞の中に固定化し、その応用が意味的凝結により正当化できであろう操作である。石井のモデルによれば以下のように図示するこ



とができるだろう。

9. おわりに

本稿の目的は、ステレオタイプは凝結表現において多様だが、命名の視点から見直すならば、一様に、創造のプロセスに対して説明的価値を持ちうることを示す点にあった。筆者は、石井の命名モデルを用いてこれを検証して来た。そして、以下の二点を明らかにすることができた。

- 1) ステレオタイプは、石井のモデルの第二段階に関与するとき、メタ言語操作ないしは推論的操作のおかげで、言語の中に固定化される。
- 2) ステレオタイプは石井のモデルの第四段階に関与するとき、社会化のプロセスを引き起こす。

石井のモデルは、学術用語の複合名詞の創造を説明するために構築されたモデルであるが、本稿でとりあげた日常言語の複合名詞のような凝結表現についても、ステレオタイプがその創造プロセスのどの段階で介入してくるのかという問題に道筋を与えてくれるモデルである。特に、このモデルの第二段階は、個別的な言語操作と人間言語の普遍的特徴の一つである概念化が密接に関わる段階である。したがって、ステレオタイプが深く介入してくる段階である。石井のモデルをより発展させる方向で、概念化とステレオタイプ、言語操作とステレオタイプの関係について分析することは、凝結表現の創造のメカニズムをより一層解明することになるだろう。これは筆者の今後の課題である。

注

- i 本稿は平成22年度新潟大学人文社会・教育科学系学系研究支援経費(学系基幹研究)によるプロジェクト「節両縁部に現れる談話機能要素の実証的・理論的研究」(代表 秋 孝道)プロジェクトの助成を受けて、2010年9月22日チュニジアのマディアで開催された国際シンポジウムJournée scientifique tuniso-japonaiseで発表したフランス語の原稿を日本語に翻訳したものである。
- ii メジュリ(1997)は、この分類をグレキアーノGreciano(1983)から借りて来ているが、メジュリ自身が言うように、これは元々ギューリッヒGülich(1978)の分類である。しかしながら、奇妙なことに彼自身、ギューリッヒの如何なる著述に現れているものなのか出典をどこにも示していない。
- iii ここでメタ言語操作とは、exocentrique(外心的)な複合名詞を作る操作を指している。
- iv 2000, Extraits prépubliés de Le lexique construit, (inédit, non paginé)
- v 同上
- vi WAGNER, R.-L.(1968 : 65-82)
- vii MOSBAH, Saïd (2003 :151-173)

参考文献

- ・ AMOSSY, Ruth, 2007, Stéréotypes et clichés, Armand Colin
- ・ BENVENISTE, Emile, 1966, “Formes nouvelles de la composition nominale”, B.S.L.P., t. LXI, fasc., p82-95
- ・ CORBIN, Danielle, 1997, “Locutions, composés, unités polylexématiques : lexicalisation et mode de construction”, in La locution entre langue et usages, pp.53-101
- ・ CORBIN, Danielle, 2000, Extraits prépubliés de Le lexique construit, (inédit, non paginé)
- ・ DARMESTETER, Arsène, Traité de la formation des mots composés, Champion
- ・ DE SAUSSURE, Ferdinand, 1916, Cours de linguistique générale, Payot
- ・ GRÉCIANO, G., 1986, Signification et dénotation en allemand, La sémantique des expressions idiomatiques, Recherches linguistiques, Etudes publiées par le Centre d'Analyse syntaxique, Université de Metz IV, Faculté des lettres et sciences humaines.
- ・ ISHII, Masahiko, 2007, Gendai Nihongo no Fukugougo Keiseiron, Hitsuji Shobou
- ・ MARTINET, André, 1979, Grammaire fonctionnelle du français, Didier
- ・ MEJRI, Salah, 2003, “La stéréotypie du corps dans la phraséologie : approche contrastive”, in Phraséologie und Parämologie, Band 14, p203-217
- ・ MEJRI, Salah, 2000, “Figement et dénomination : approche contrastive”, Méta XLV 4, p609-621
- ・ MOSBAH, Saïd, 2003, “La stéréotypie et la structuration du sens : cas de la polysémie et de la polylexicalité”, in Syntaxique et Sémantique, p151-173, Presse Universitaire de Caen
- ・ MOSBAH, Saïd, 2006, “La stéréotypie dans les séquences figées : entre transparence et opacité”, in Composition syntaxique et figement lexical, p245-260, Presse Universitaire de Caen
- ・ SCHAPIRA, Charlotte, 1999, Les stéréotypes en français : proverbes et autres formules, Ophrys
- ・ WAGNER, R.-L., 1968, “Réflexions à propos des mots construits en français”, B.S.L.P., t.LXIII, fasc. 1, p65-82